

『坂の下に降る白い雪』

柏原康馬

『坂の下に降る白い雪』

「ねえ、幹也」

「ん？」

「幹也って、銀杏、好き？」

綾香は、彼女いわく最近マイブームらしい茶碗蒸しから、丸くころんとした銀杏だけを器用にすくい取り、僕の返事を待っている。雰囲気だけは高級そうに見える濃赤色のスプーンの上で、銀杏が静かにおいしそうな湯気を立てている。きっとそれを食べればほくほくしたおいしさが口いっぱい広がるのだろう。茶碗蒸しのつるりとした食感に絶妙のアクセントを加えている銀杏を見つめながら、僕は答えた。

「べつにどっちでもないかな。茶碗蒸しなら俺も好きだけど」

そう答えて僕は親子丼のどんぶりに手をかけた。千円の親子丼は、僕のようなごく普通の大学生にとっては少々痛い出費なのだが、メニューに載っている写真があまりにもおいしそうだったから注文してみたのだ。やはり学食の親子丼とは違って、千円の親子丼はおいしい気がする。使っている卵が違うのか、調理してくれた人の腕の違いなのか、細かいことはよく分からないけれど、千円の価値はある気がする。

「どっちかって言うと、どっち？」

先ほどの回答では納得してくれなかったらしい綾香が、僕にはっきりとした回答を求めてくる。濃赤色のスプーンの上では未だに銀杏が湯気を立てているのだが、僕は銀杏それだけをもっておいしそうだとは思わなかった。今僕が見ている景色は茶碗蒸しありきななのである。銀杏単体を見て舌が妄想しているわけではなく、茶碗蒸しに入っている銀杏としてのおいしさに想像が膨らんでいるのである。

だから僕は、

「どっちかって言ったら、嫌いかな。まあ、あくまでも、好き、嫌い、の二択だったらっていう話だけど」

と答えた。べつに好きと言っても問題なかったのだが、今の僕は嫌いだと答えた。昨日同じ質問をされていれば異なる回答を述べていたのかもしれない。

「何で嫌いなの？」

当然来るであろうと予想していた質問だ。

僕は親子丼を口の中でもぐもぐさせながら、考えるふりをしてみる。理由ありきの回答ではなく、回答ありきの理由なのだから困ったものだ。好きなものは好きだから好きだし、嫌いなものは嫌いだから嫌いだ、という論理が成り立ってもよさそうなものだが、おそらくそんな理由では綾香は納得してくれないだろう。

そもそも理由を考えている時点で先程の回答がいい加減なものだということは明白であり、綾香の目にもそのように映っているのだろう。しかし、僕と綾香はそういう細かいことは気にしていない。親しい友人という関係で繋がっている僕と彼女は、会話を楽しんでいるにすぎない。

いのだ。

「だって、臭いじゃん。食べればおいしいのはわかってるけど、道端であれだけこころ悪臭を放たれてたらとても好きにはなれないね。特に、踏ん付けた時には三秒で憎悪の対象に変わるし。だから俺は、銀杏が嫌いなの」

「幹也もかぁ。この前、沙希にも同じこと聞いたら、幹也と同じこと言ってた。沙希の場合はもっと嫌悪感たっぷりに、あんな悪臭を食べるなんて信じらんない、とか言ってたよ。茶碗蒸しの銀杏を沙希の顔に近づけるだけで、鼻をつまんで身体を遠ざけちゃうんだから、私、思わず笑っちゃった」

そう言って綾香は高級そうなスプーンを僕の前へと近づける。その上にはころんとした銀杏が乗っかっている。湯気はもう立っていない。

「俺はそこまで毛嫌いしてませんよ。普通に銀杏食べられる人だし」

何食わぬ顔で親子丼を食べ続ける僕を見て、綾香は少しつまらなさそうに銀杏を自分の口へと運んでいった。綾香は、やっぱり銀杏はおいしい、と言いながら茶碗蒸しをすくっては自分の口の中へつるんとすべり込ませている。言葉にすることでそのおいしさを確認しているらしい。なんだか綾香の表情を見ていると、僕の方まで茶碗蒸しを食べたくなってくるのだが、これ以上食事にお金をかけるのは躊躇われたので、追加のオーダーはしないことにした。学生の財布はそこまで緩くないのである。

「でもさあ」

茶碗蒸しを食べながら、綾香が訊ねてきた。

「幹也は銀杏を普通に食べられる癖に、銀杏は嫌いなんですよ？」

「そうなるね」

僕の答えに満足できないらしい綾香は、僕のどこを見るでもなく唇を尖らせている。

「ふ～ん」

綾香はそれ以上銀杏の好き嫌いについて言及することはなかった。

僕としてはもうちょっと踏み込んだ質問をされても何ら困ることはなかったのに、などと思ったりもした。屁理屈ならいくらでも浮かんでくるからだ。

綾香に、なんで？ と問われれば、僕は、食べ物としての銀杏は好きだけれど、銀杏の悪臭は大嫌いなんだ。だから、この二つの要素を天秤にかけた結果、僕の中では銀杏は嫌いだという結論に達したわけ。という答えを返していただろう。理由なんて考えれば考えただけ浮かんでくるものなのだ。その理由が核心に迫っているかどうかは別として。

綾香がおいしそうに茶碗蒸しを食べているので、僕も黙々と親子丼を食べ続けた。さっきの会話で綾香が機嫌を損ねると思えないので、僕は店内の雰囲気に入りながら千円の味にふけていた。店内は蛍光灯を用いず、ランプの暖色でそのやわらかな雰囲気を演出している。柱やテーブルは黒を基調とした落ち着いた色合いで統一されており、店員の接客と合わせると実

に高級感あふれる印象を受けてしまう。だから僕は、この店の親子丼が千円であることになぜだか納得するようになっていた。この店の親子丼が五百円だったら、それはそれでなんだか嘘くさい。

茶碗蒸しを食べ終えたらしい綾香は、僕が親子丼を食べ終えるのを待っている。千円もする親子丼の味をしっかりと味わおうという意識が強すぎたのか、僕の食べるペースがかなり遅かったらしい。でも彼女は苛立っているという様子ではなかった。むしろ、その親子丼ちょっと頂戴、と言わんばかりの羨望の眼差しで僕のどんぶりを見つめている。

ちなみに綾香は茶碗蒸しの前に山菜うどんを食べ終えている。彼女にとって今日の茶碗蒸しはデザート代わりらしい。

「食べ終わった？」

綾香は、おしぼりで口元を拭う僕を見ながらそう訊ねてきた。そんなこといちいち聞かなくても、空になったどんぶりを見ればわかりそうなものなのに。米粒一つ残していないのだから。

「もう出るのか？ まだ食べ終わったばかりなんですけど」

「じゃあ、お茶飲んでからにしようか。明日、一限目が英語だからあんまりゆっくりもしてらんないし。予習しないと厳しいんだよね」

「なるほどねえ。まあ、言語科目ってのは担当の教授次第だよな。俺らの英語の先生はかなり楽勝で単位くれるらしくてさ。予習なんてしたことない」

「いいなあ～」

こんな会話をしながら僕はお茶を飲み終えた。お茶を飲み終え、席を立った僕は初めて、自分が頼んだ親子丼のお盆の隅に、綾香が使っていたのと同じようなスプーンがあることに気付いた。お盆の色とスプーンの色が同じだったから気付かなかったのだ。この高級そうな濃赤色のスプーンを使えばもっとおいしい親子丼になったかもしれないな、などという小さな後悔が湧き出たものの、時すでに遅しである。

気付けなかった未使用のスプーンを残したまま、僕と綾香はこの店を後にした。

○

坂が重い。

おそらくこの大学に通う大半の生徒はそう思っているはずだ。大学のキャンパスにたどり着くまでに、僕たちは長く蛇行した坂道を登らなくてはならないのだから。僕が去年、大学一年生だった頃には、自転車でこの坂道にトライしては途中で断念し、手押しに切り替えたものだが、今はそのような光景を見ることができない。この坂道は歩行者専用になってしまったからだ。

自転車が通行禁止になった理由は、坂道を下る際に歩行者との接触事故が多発しているから

というのが主だったものらしい。大学側に多くの苦情が寄せられているそうだ。確かに一限目の始めと四限目の終わりは人の流れが激しく、それほど道幅が広くないこの坂道は歩行者であふれかえってしまう。人と人の隙間はわずかしがなく、その間を自転車ですり抜けるというのはなかなか難易度が高いのだろう。だから接触事故が多発しているということも納得できる。

そうは言っても、終日自転車通行禁止という大学側の措置に、僕は全く納得していないのだが。

「おはよ」

重い坂道の途中で僕は声をかけられた。声の方に視線を向けると、そこには谷中がいた。

「おう、おはよ」

谷中良太は僕とおなじ経済学部で、大学二年生だ。

「幹也の今日の予定はどんな感じ？ とりあえず一限目は英語だろ？」

「ああ。まあ、一限目と二限目は授業に出るつもり。午後はまだ決めてない」

「じゃあ、昼飯食ったらキャッチボールでもしようぜ」

ご飯を食べたすぐ後に運動をしたら横っ腹が痛くなりそうな気もしたが、谷中が言っているのはそんな直後の話ではないはずだ。しかし、三限目の授業はどうするつもりなのだろう。

「良太、お前、三限目の授業は何取ってんの？」

「統計学。でも、意味分かんねえから出ないと思う。時間の無駄っていうかなんというか」

谷中の答えは学生によくありがちな言い分だった。意味が分からないから授業に出席しない。どうせ寝てしまうのだから時間ももったいない。そう自分に言い聞かせて授業を欠席することはよくあることだ。もちろん僕だってそんな学生の一員なのだけど。

「で、どうなの幹也。キャッチボールしてくれるのか？」

「どうやら僕も三限目はサボらなければいけないらしい。」

「べつにいいけど、俺、グローブ持ってきてないぞ」

「大丈夫、大丈夫。大学から借りられるらしいから。心配すんな」

僕の肩をポンポンと二回ほど叩いた後、谷中は、時間ギリギリだとまずいから、と言って、走って教室に向かっていった。まったく、真面目なのだから不真面目なのだからよく分からない。語学の授業は三回欠席しただけで無条件に単位がもらえないという決まりがあるから、谷中が急ぐ気持ちはよくわかるのだけれど。

僕が取っている英語の先生が、緩い教授でよかったなあ、などということを考えながら、僕は重い坂道を歩き続けた。

○

秋と冬が混じった風を頬に受けながら、僕と谷中は大学のグラウンドでキャッチボールをし

た。一限と二限の授業はいつも通りなんの変化もなく終了し、グラウンドではフットサルなどいくつかのサークルが青春の汗を流している。

今は二人でキャッチボールをしているだけの僕と谷中だが、もちろん僕たちもサークルに入っている。正確に言うと入っているという表現は正しくなくて、僕たちが一年生だった頃に立ち上げたサークルに所属していると言った方が正しいのだろう。つまり、僕たちはサークルの立ち上げメンバーということになる。サークルの内容は野球サークルであり、取り立てて説明をする必要がないくらいサークル名に忠実なサークルだ。しかし、ここ数カ月、試合をしたという記憶がない。人手不足なのだ。

僕たちの勧誘不足のせいで新入生をほとんど獲得できなかったこともあるが、それより大きな原因は、最初の頃はサークルに参加していた立ち上げメンバーが、アルバイトや彼女との用事などを理由に練習に参加しなくなってしまったことだろう。人数が集まらないのだから試合などできるはずもない。

キャッチボールを終えた僕と谷中は、心地よい汗を拭つつ休憩がてら学生食堂へと足を運んだ。ドリンクバーを注文した僕たちは、コーラを片手に時間を浪費していた。

「こんな学生生活を送って、俺たちは大丈夫なのかねえ」

単位の心配をコーラで溶かすようにしながら、谷中が溜息をついている。谷中も一応そんな心配をしているのか、などと思いながら、僕はコーラの気泡を見つめていた。

「大丈夫なものも、なるようにしかならないんじゃないか？」

僕はまたつまらないことを口にしてしまった。深く考えてもいないのに口が開いてしまったのだ。なるようにしかならないとは言っても、授業をサボるより出席した方がよりよい学生生活を送れるであろうことはわかりそうなものなのに。少なくとも、卒業の心配をしなくて済むという意味においては。

「幹也君、それ、どゆこと？」

小粒の氷を口の中で転がしながら、谷中は僕の発言に喰いついてきた。いつものようになんとも聞き流してくれればいいものを、暇という香辛料は無駄に人の好奇心を刺激してしまうからたちが悪い。

だが、僕の口はよく動いてくれた。

「そのままの意味さ。就職するにしたって、景気が良ければ馬鹿でもそれなりの企業から内定もらえるし、逆に、景気が悪けりゃ優秀な学生だって内定もらうのに苦労するわけで。つまりところ、景気がいいか悪いかっていう、俺たちにはどうしようもない次元で、俺たちの人生は決まってしまうわけ。だから、なるようにしかならないってこと」

「ほうほう。ってことは、俺たちがしなきゃならないのは、卒業するための努力だけってことになるよな？」

「そうなるな。まあ、単位集めるくらいの必要最低限の努力はお前だってできるだろ」

「過去問があれば」

「じゃあ、がんばって集めろ。そして、俺にも回してくれ」

そんな不毛な会話を交わしている僕と谷中の隣に、活動休止も囁かれている野球サークルの少ない残留メンバーが腰をかけた。僕も合わせて四人しかメンバーがいないとは、僕たちの野球サークルの未来はコーラの中に沈んでしまいそうだ。

現れたのは、

「幹也も良太も、暇っていう字が顔全体に広がってるわよ」

綾香と、

「幹やん、良ちん、久しぶりい。実はうちらも暇なんだあ」

沙希だった。

僕たち四人は学食で時間をつぶした後、四人揃って四限目の授業に出た。経営戦略という看板を掲げたこの授業はなかなか面白い。だから僕はこの授業だけは毎週欠かさず出席するようにしている。谷中は初めてこの授業に出たらしいのだが、まあまあかな、という感想を漏らしていたから、教壇の上に立つ金子教授の話術はなかなか巧みであると言ってもいいはずだ。

深緑色の黒板には国内自動車業界一位と二位の企業の戦略の違いが書かれていた。書かれていると言ってもそれは子供の落書きのような殴り書きのものでしかなく、その詳細は教授の口からつらつらと語られている。

自社製品を基準にグレードを上げていける業界一位と、ターゲット層におけるグレードの製品について業界一位との差別化に注力する業界二位自動車企業。要は、自分の道さえしっかり見ていけばいいのが業界一位で、常に業界一位を意識していなければいけないのが業界二位ということになる。前を見るか、横を見るか、この行動の違いは決定的な意識の違いを生み出すのだろうけれど、どちらがいいのかなんて僕には分からない。企業が競い合うというのはいいことだし、そうやって僕たちの生活レベルは向上してきたのだから。二位の企業が一位の企業を業績で上回るといふ事例は少なからず存在するのだから。

授業が終わり、周りの学生がぞろぞろ退出していく中で、僕たち四人はのんびりと筆記用具やノートを鞆の中にしまっていた。特にすることもないのだから急ぐ必要などないのだ。

「私たちってフォロワーだよな」

僕と谷中の前に座っていた沙希が振り向きざまに口を開いた。たまたま目が合ってしまった僕は、そうだろうね、という無難な返事をした後、

「そもそも人間に一位とか二位って順位はないから、言ったら全員フォロワーなんじゃないかな。みんながみんな個性的であろうとしているのが人間社会ってものだろうし」

という答えを沙希に返した。言ったそばから、みんながみんな個性的であろうとしている、という発言に対する反例がいくつも浮かんだのだが、沙希が言いたかったのはどうやらそうい

うことではないらしい。

「そうじゃなくて、学歴だよ、学歴。来年の今頃、私たちは就職活動してるんだよ。たぶんだけど。だから、そういう意味で私たちってフォロワーだと思わない？」

自分の進むべき道を真っ直ぐ見つめられる優秀な学生と、彼らを常に意識しながら彼らとの違いを探して差別化に磨きをかけなければいけない僕たちフォロワー。もし本当に就職活動というものの本質がそのようなものなら、僕は鬱になってしまいそうだ。社会に出てやっていけるだけの自信がまったくもって存在しない。

「なるほどねえ」

そう唸った谷中は、怠惰な学生生活を過ごして来た自分自身を呪っているのだろうか。それとも他者との違いを懸命に探しているのだろうか。

僕の視界の左端では綾香が首をかしげている。たぶん僕と綾香は今、同じことを考えているのだと思う。就職活動の本質はそんなところにはないはずだ、ないはずなのだけど、そう主張するだけの根拠を持ち合わせていない。さらに僕の場合は、そうであってほしくない、という主観的な主張が多分に内包されているわけなのだが、綾香の思っていることと本質は変わらないだろう。

学歴という名札で僕たちが評価されているのなら、僕たちの未来は偏差値で拘束されてしまっているのだろうか。

「就活が怖い」

そう言いながら沙希は自分の両耳を押さえている。いったい何を遮断しているのだろうかと思って、彼女を見ていると、

「よし」

と言って勢いよく立ちあがった。自分を他者より良く見せるためのいい案でも思いついたのだろうか。そう思って沙希の発言に注目していると、

「ご飯食べに行こう」

かなり文脈から外れた提案が僕たちの前に降ってきた。僕と谷中は特に断る理由もないので、二人して綾香の反応をうかがうことにした。綾香もとくに用事はなかったようで、一度こくりと頷いた後、沙希に続いて立ち上がった。

結局、綾香は就活の話題について一言も発言することはなかった。

○

「お待たせいたしました。豚キムチ定食になります」

お店のおばちゃんがそう言って、僕の前にできたての豚キムチ定食を置いてから、三十分が経過した。

一人暮らしの僕がスーパーのキムチを使って作る豚キムチとは、比べ物にならないくらいおいしい料理を僕は満足に平らげた。この店の豚キムチには、普段僕が使わない調味料が入っているのだろう。そうでなければここまでの味の違いは出ないはずだ。

今僕の前にある皿の上には千切りキャベツだけが残っている。野菜を最後に食べるというのは僕の癖なのだ。野菜が嫌いだとかそういうわけではなくて。

嫌いだから最後まで食べないのだという主張に対する反例は、綾香だ。

綾香はまたもやデザート代わりに茶碗蒸しを頼張っている。メニューに茶碗蒸しが載っているようなお店は、ファーストフードに比べてそれほど多くはないのだろうけれど、大学の近くには学生がよく集まるようなアットホームなお店があって、そういうお店のメニューには、なんでもあったりする。メニューになくても、頼めば作ってくれたりもするのだから、学生にとっては実家みたいにながままが言える貴重な空間なのだ。

幸せそうに茶碗蒸しを食べ続ける綾香と、面倒くさそうにキャベツをつついている僕を見ながら、沙希と谷中はさっきの就職活動云々という話題についてダラダラと語り合い、彼らなりの結論を見つけたらしい。

沙希と谷中の結論は、結論のくせにダラダラ長いので要約すると、自分たちが就活でうまく行かなかったらそれは学歴のせいなのだ、という責任回避の最たるものだった。

別に僕はその結論を否定するつもりはさらさらなくて、むしろ、谷中と沙希らしい結論だなと思って笑ってしまったくらいだ。だから僕は皿の上のキャベツをつつきながら、別の話題に切り換えるべく、沙希にちょっとした質問を試してみた。

「そういえば最近、大学で見かけなかったけど、どこか行ってたのか？」

何も深く考えずにした質問だったのだが、沙希はなぜだか嬉しそうな顔をして、待ってましたと言わんばかりの前屈み具合で答えてくれた。

「デートよ、デート。彼氏ができたの」

僕と谷中は顔を見合せ、同時に、マジで？ という言葉を発していた。冷静に考えれば沙希は彼氏がいても全然おかしくないくらいの容姿をしているから、彼氏がいなかった今までがどちらかというところ異常だったのだろうが、それでもやはり、急に、彼氏ができました、と言われると、こちらとしても驚くという反応を取ってしまう。

綾香はその事実を知っていたようで、べつだん驚くような表情は見せず、茶碗蒸しのスプーンを愛らしく銜えながら、羨ましい、という言葉^{くわ}を連呼していた。綾香だって頑張れば、彼氏くらいすぐにできそうなものなのになと思ったが、大きなお世話だろうから口に出してまでは言わなかった。

あまりにも沙希が幸せそうだったので、僕たちは沙希のおのろけ話を根掘り葉掘り聞いてあげることにした。相手はどうやらバイト先の先輩らしく、僕たちとは全く面識がない人のようだ。

「で、沙希はその人のどこに惚れたんだ？」

谷中の質問にも沙希は嬉しそうに答えている。こういう質問にはもっと恥ずかしがってもいいんじゃないかな、と思ったりもしたが、沙希は全然気にしないらしく、

「背が高いところかなあ。一八〇センチあるし」

などと、その他いくつかの理由を挙げながら説明していた。優しいところとか、空気を読めるところ、などという理由も挙がっていたのだが、沙希の性格からして真っ先に挙げた、背が高いから、という理由が最も大きなウェイトを占めているのだろう。沙希らしいといえば沙希らしい理由なのだが、そんな答えを返されては、こちらとしては少しからかってみたくなる。

「じゃあ、その彼が一八〇センチじゃなくて、一七〇センチだったら沙希は今の彼氏と別れるのか？」

僕の問いに、沙希は首を振っている。

「別れないよお。だって少しくらい背が縮んでも格好いいことに変わりはないもん。イケメンだもん」

「じゃあ、一六〇センチだったらどうなの。やっぱ付き合い続けるの？」

今度は沙希の口が開くまで三秒くらいの間があった。

「た、ぶんね。たぶん別れないと思う。たぶんね。わかんないけど……」

沙希のこういう素直な反応は、見ていてたまに可愛いとすら思えてしまう。この後も僕たちは沙希にいろいろ意地悪な質問を浴びせ続けたのだが、ころころと表情を変えながら話す沙希を見ていると、正直って素敵だな、なんて思ったりもした。

彼の見た目はそのまま、少しマザコンな一八〇センチと、親から自立した大人らしい一七〇センチだったらどちらを選ぶか、という問いかけに、沙希は、

「一八〇センチの方。だって、母親想いってことでしょ？」

と躊躇なく答えていたし、ややポッチャリめの一八〇センチと、スマートな一七〇センチだったらどちらを選ぶかという質問には、

「ん～、難しいけど、一八〇センチの方かな。少しくらい体格いい方が頼りになりそうだし」

と考え込みながら答えてくれた。沙希にいろいろ質問してみてわかったことは、一七〇センチだとネガティブにうつる身体的特徴も、一八〇センチの人であれば全然気にならないらしいということだ。気にならないどころか、沙希の目線では若干ポジティブに映る傾向があるらしい。

「そうか、沙希は一八〇センチに惚れたのか」

怒るかな、と思いながらした僕のこの発言にも、沙希は全然嫌がる様子も見せずに、

「やっぱり一八〇センチは格好いいよ」

などと嬉しそうに答えていた。

僕の隣では谷中が、ああ、あと五センチ足りねえ。神様、あと五センチください、なんて両

手を合わせてお願いしていたので、僕は店のおばちゃんに、メニューには載っていないホットミルクを注文してあげた。僕自身も一八〇はないから男二人分だけにしようと思ったのだが、沙希と綾香もせっかくだからということで、結局四人分のホットミルクを注文することになった。そして、暖かいミルクを飲み終えた僕たちは、各々下宿先へと帰ることになったのだ。

十二月初めの夜はまだ、ほんの少しだけ温かった。

○

重い坂道をしわだらけの銀杏が転がり落ちていった。小刻みに進路を変えながら、坂を上る僕とは真逆の方向へと静かに消えていく。

そんな光景を見ながら僕は、時間というのは同じなんだなと思った。上りと下り、方向は違えども過ごしている時間は同じなのである。時間というのはなかなか難しいものらしい。

何もしなくても時間は過ぎていく。電池を外せば時計の針を止めることはできるけれど、僕たちの生活が止まるということはない。止まっていた時計も僕たちの生活に合わせて時間を早送りされることになるだろう。そして、僕たちが動かず怠惰な時間を過ごしたとしても、時計という時間は止まることはない。怠惰に過ごした分だけやるべきことを早送りでこなさなければいけないだけだ。

だったら部屋の時計をすべて止めてしまって、その上で僕が全く動かない怠惰な時間を過ごしたなら、時間は止まってくれるのだろうか。

たぶん、いや、絶対に止まることはないだろう。時計は僕の部屋の外でも動いていて、僕が部屋の外に出た瞬間に、僕は外側の時間に合わせて行動しないといけなくなるのだから。

だったら家中の時計を止めて——。そんなことを考えていたらきりがない。それに、考えるまでもなく、世界中の時計を止めたところで時間は止まらないはずだ。なぜなのかはよく分からない。体内時計のせいだろうか。もしそうなら、自分が死んだ時に初めて僕たちの時間は止まるということになる。これは多分間違っていない。自身の^{むくろ} 軀の外で時間が流れていたとしても、それはもう自分の時間ではないのだから。結果的に自分の時間はもう止まってしまったことになる。そう考えると、もしかしたら時間というものはものすごく主観的なものなのかもしれない。自分を中心に世界が回っていると言っても大げさではないはずだ。それならば、僕たちはみな、生来自己中心的だということになる。ネガティブな意味合いで使われがちな自己中心的という言葉は、本来はごく自然なものなのだ。水の中でしか生きられない金魚に文句をふきかける人はそうはいないはずである。

時間は直進することしかできない。時間が直進するのに体力がいるとは思えないけれど、その時間に背中を押されながら前へ進むことしか許されていない僕たちは、何もしなくても少しばかりの体力を使っているのかもしれない。今は、ほんの少しだけそう思っている。なぜなら

手を合わせてお願いしていたので、僕は店のおばちゃんに、メニューには載っていないホットミルクを注文してあげた。僕自身も一八〇はないから男二人分だけにしようと思ったのだが、沙希と綾香もせっかくだからということで、結局四人分のホットミルクを注文することになった。そして、暖かいミルクを飲み終えた僕たちは、各々下宿先へと帰ることになったのだ。

十二月初めの夜はまだ、ほんの少しだけ温かった。

○

重い坂道をしわだらけの銀杏が転がり落ちていった。小刻みに進路を変えながら、坂を上る僕とは真逆の方向へと静かに消えていく。

そんな光景を見ながら僕は、時間というのは同じなんだなと思った。上りと下り、方向は違えども過ごしている時間は同じなのである。時間というのはなかなか難しいものらしい。

何もしなくても時間は過ぎていく。電池を外せば時計の針を止めることはできるけれど、僕たちの生活が止まるということはない。止まっていた時計も僕たちの生活に合わせて時間を早送りされることになるだろう。そして、僕たちが動かず怠惰な時間を過ごしたとしても、時計という時間は止まることはない。怠惰に過ごした分だけやるべきことを早送りでこなさなければいけないだけだ。

だったら部屋の時計をすべて止めてしまって、その上で僕が全く動かない怠惰な時間を過ごしたなら、時間は止まってくれるのだろうか。

たぶん、いや、絶対に止まることはないだろう。時計は僕の部屋の外でも動いていて、僕が部屋の外に出た瞬間に、僕は外側の時間に合わせて行動しないといけなくなるのだから。

だったら家中の時計を止めて——。そんなことを考えていたらきりが無い。それに、考えるまでもなく、世界中の時計を止めたところで時間は止まらないはずだ。なぜなのかはよく分からない。体内時計のせいだろうか。もしそうなら、自分が死んだ時に初めて僕たちの時間は止まるということになる。これは多分間違っていない。自身の^{むくろ} 軀の外で時間が流れていたとしても、それはもう自分の時間ではないのだから。結果的に自分の時間はもう止まってしまったことになる。そう考えると、もしかしたら時間というものはものすごく主観的なものなのかもしれない。自分を中心に世界が回っていると言っても大げさではないはずだ。それならば、僕たちはみな、生来自己中心的だということになる。ネガティブな意味合いで使われがちな自己中心的という言葉は、本来はごく自然なものなのだ。水の中でしか生きられない金魚に文句をふきかける人はそうはいないはずである。

時間は直進することしかできない。時間が直進するのに体力がいるとは思えないけれど、その時間に背中を押されながら前へ進むことしか許されていない僕たちは、何もしなくても少しばかりの体力を使っているのかもしれない。今は、ほんの少しだけそう思っている。なぜなら

後悔をするときはいつも、何もしなくたって疲労している自分がいるのだから。

そう、今の僕は少しだけ後悔している。

四人でご飯を食べた翌日、綾香は大学に顔を出さなかった。その次の日も授業を欠席していた。綾香が大学を休み始めて三日目の昼になって初めて僕は、綾香が風邪をひいて家で寝込んでいたという事実を知った。沙希から聞いたのだ。どうやら綾香はインフルエンザではないただの風邪のようで、全く心配する必要はないと知らされたのだが、なぜだかすごく悔しかった。

あの日の綾香はやけに無口だなということには気付いていたはずなのに、彼女の体調のことまで気にかけてあげることができなかった自分がいたからだろうか。沙希でも気付くことができなかったのだから、僕が気付けなかったのは当たり前だという風に考えるのは逃げでしかない。だから僕はそう考えることができなかった。

綾香は下宿先で一人暮らしをしている。だから、沙希がつきっきりで看病をしていたらしい。一八〇センチの彼氏の事などほかりっぱなしで看病をしていたそうなのだが、沙希はずっと綾香の心配ばかりしていた。沙希にとって一六〇センチ弱の綾香は、一八〇センチとは比べ物にならないくらい大切らしい。

沙希が綾香を看病しているその場に僕もいて、僕も一緒に綾香の心配をすることができたのなら、僕は何を感じ、何を思ったのだろう。

時間に置き去りにされた後悔を遠くに見ながら、僕は坂道を上っていった。この後悔の源泉がどこにあるのかということもはっきりと分からぬまま、僕は歩き続けた。落ちていた銀杏を踏まぬように注意深く歩いていたせいもあるのだろうか、僕は自分の歩調にぎこちなさを感じた。自分の身体のどこかにファスナーがあって、自分の中から知らない誰かが出てきてもおかしくないような、そんなよそよそしさを自分自身に感じながら、僕は一限目の授業が行われる教室へと足を運んでいた。

いつもは全く理解する気になれない余所余所^{よそよそ}しいドイツ語の授業が、この日はなぜだかすんなりと自分の中に沁み込んでくるように感じるのであった。

○

ランチの時間は谷中とすごした。学食での会話は沙希のことから始まり、終いには自分たちの恋愛事情にまで発展していた。谷中のタイプは胸が大きくて心も大きな女性なのだそう。これは半分冗談なのだろうけど、話を聞いていて受けた印象として、谷中は、一緒にいて違和感を感じない女性がいいらしい。波長が合う人がいいとも言っていた。だから一目惚れといった類の現象を経験したことがほとんどないのだそう。

「で、幹也はどんな女の子がタイプなわけ？」

当然のごとく、僕自身もそういう話をしなければいけなくなってしまった。しかし僕もこう

いう話を心底恥ずかしいと思うほど若い時代を生きているわけではない。

「難しいけど、まず最初に視線が行くのは足だな」

「細いのがタイプ？」

「少しくらい肉が付いてたほうがいいな。太いのは嫌だけど」

谷中はまだ僕の言葉を待っている。

「で、あとはやっぱり顔かな。特に、目がでかいとかね」

一通り聞き終えた谷中は、まだ満足していないらしく背もたれにもたれかかってしまった。

「いやいや、幹也君。さっきから見た目ばかりじゃないか。もっと内面的な好みとかはないわけ？」

谷中の問いに僕は一口水を飲んでから答えた。

「優しい子かな。あとは、一緒にいて楽しいとか」

ふ〜ん、といいながら谷中が口を開く。

「じゃあ、綾香はどうなの。お前ら仲いいじゃん」

急に出てきた名前に、僕はぎこちなく首を振った。

「いや、綾香はそういう対象じゃないないって」

「なんで？ 俺が言うのもなんだけど、綾香はそこそこ可愛いと思うぞ。俺たちとつるんでなけりゃ、たぶんモテ組の女の子だと思う」

谷中の言うとおりの、確かに綾香は僕たちといたなくてもっと大きなサークルに入っていれば、かなりモテモテの学生生活を送ることができたはずだ。それなのに僕たちと一緒にいるのは、正直なところもったいないと思う。本当に、もったいない。そんなことを考えていると、なんだか綾香に申し訳ないことをしているような気持ちになってしまった。

「だったら良太が付き合えばいいじゃん。綾香と」

僕の発言に、谷中は呆れたように首を振っている。

「お前、よくそんなこと言えるな。もっと綾香を大切にしたいと思うぞ」

珍しくまじめなことを谷中は口にした。谷中の言っていることと真剣に向き合うのが恥ずかしかった僕は、グラスに入っている水を一気に飲み干した。

「綾香は大切な友達だってことくらいわかってるさ。ただ、彼女とかそういう目では見られない。なんか知らないけど」

「じゃあ、どういう人と付き合いたいわけ」

「俺は良太とは逆で、一目惚れとかがしてみたい。んで、付き合いながら彼女の過去とかを知って行って、ますます好きになっていく、とかいうパターンね」

谷中は、ああ、そのパターンね、といって一口お茶を飲んだ。

「そうか、幹也君は新しい物好きですか」

「いや、そういう言い方はどうだろう」

ランチを食べ終えた僕たちは、遅刻気味の足取りで三限目の授業へと向かうことにした。

○

低い空の下で、僕と谷中はキャッチボールをした。

「幹也、今単位どんなもん？」

「まだまだ揃わないって。俺らまだ二年生だろ。揃うわけないじゃん」

僕と谷中の間で軟式の白球が行き交っている。時折、パンッ、という切れの良いグローブの革の音がグラウンドに響き、低い空へと吸い込まれていく。今は四限終わりの放課後なので、グラウンドの中央ではアメフト部が大きな身体を軽快に弾ませている。

珍しく、谷中が投げたボールが僕の胸ど真ん中に着地した。

「ナイスボール」

僕の声聞いて、谷中は自慢げな顔を見せている。

「見たか、俺の才能」

「そういうセリフは十回続けて投げられるようになってから言え」

僕が投げた直球が谷中の胸の前で、パンッ、と小気味良い音を鳴らす。その音がグラウンドに響くのを聞き終えてから、谷中は再び口を開いた。

「なあ、幹也、卒業するってどういうことだと思う？」

「は？ なんだよ急に」

「いや、べつに深い意味はないんだけど、なんとなく気になったからさ」

卒業。大学二年生である僕は、その言葉をそれほど意識したことはない。卒業なんて単なる通過儀礼の一つで、放っておいても向こうからやってくるだけのもの。それくらいの認識しかなかった。でも、本来の卒業とは僕たちが自分の足を使ってそこまでたどり着くものなのだろう。そういう能動的な儀式でなければいけないはずだ。

義務教育の下で、卒業が能動的なものだなんて思ったことは一度もなかった。実際、何もしくたって僕は卒業式を迎えることができたし、高校に入ってから義務教育時代とその印象は変わらなかった。毎日学校にさえ通っていれば、卒業の方から僕たちに歩み寄ってきてくれたのである。

そういう意味では、確かに大学における卒業は今までのものとは異なるのだろう。どんなに真面目に毎日授業に参加したところで、試験の点数が良くなければ単位なんてもらえないし、単位がもらえなければ卒業式を迎えることはできないのだから。

「卒業ってさ、」

山なりの谷中のボールが、一瞬雲に隠れてから再びその軌道をあらわした。

「どこから卒業するんだと思う？」

谷中の疑問に僕は、思いついたままの答えを返した。

「大学。もしくは、親。もしくは、モラトリアム」

まあそんなところだろう、そう思いながら、僕は谷中に白球を返した。

「じゃあさ、幹也、大学って何だと思う？」

今日の谷中は珍しい。珍しくまじめな話をしているし、珍しく一つ一つの会話を深く掘り下げてくる。この前、沙希と盛り上がっていた、就職活動の話が影響しているのだろうか。

僕は大学について深く考えることも今までしてこなかった。そりゃあ、大学受験の時は大学というものとしっかり向き合ってきたような気もするのだが、今になってよく考えてみると、大学と向き合っていたというよりは、むしろ、偏差値と睨めっこをしていたと言った方が正しい表現になるのだと思う。

確実に入れる偏差値を探しながら、その反面、絶対にそれ以上は下げたくない大学のレベルというものがあって、その二つのジレンマの中で当時の僕は苦しんでいた。そして、自分なりの妥協点を見つけ出し、納得という言葉をも自分の中で作り上げることによって、僕は試験に臨むことができ、合格という結果を得ることができたのだ。

考えれば考えるほど、谷中の質問に対する僕の答えは、一つの言葉へと集約されていくような気がした。

「義務教育、かな」

僕の答えに、谷中は静かな笑みを浮かべている。

「俺もそう思う」

そうなのだ。考えれば考えるほど僕は、大学という建物は義務教育でしかないように感じてしまうのだ。なぜなら、受験生だった時の僕には、大学に進学しない、という選択肢は一ミリたりとも存在していなかったのだから。親も教師も高校の友人も、みんな大学ありきで生活していたし、授業をしていたし、会話をしていた。だから僕は高卒で社会に出るという自分を想像したことは一度もなかったし、高卒という選択肢があることも知らなかった。これは大げさに言っているのではなくて、高卒という言葉が浮かんでこなかった以上、本当にその選択肢を知らなかったのだと思う。

僕の中における大学というものの存在価値は、社会に出るためのステータスでしかないのだ。就職活動の時に企業が大学名で人選しているなら、それは間違った行為なのだと僕は思ってきた。しかし、かく言う自分自身も社会的ステータスを得るために受験勉強をし、それなりのステータスを得られる大学を選別し、実際に受験したのだ。つまり、僕自身も大学名に価値があることを受け入れていることになる。だったら企業の人事に文句を言う資格など、僕には全くないということではないか。

「大学って、何なんだろ」

今度は僕がそうつぶやいていた。反対側では谷中が、背伸びをしながら空を見上げている。

今日の空は一面雲だ。だから今日は空が低い。

「だから、義務教育だって」

そう言いながら、谷中はアメフト部の方に視線を向けていた。今の僕たちには、アメフト部がなんだか羨ましく思えてくる。汗まみれの青春を謳歌する彼らは、僕たちのように陰気臭い閉塞感にさいなまれてはいないように見えたから。一人一人が輝いているように見えたから。

「なあ、良太」

なぜだか今日の谷中には、こちらからも質問を投げかけてみたくなる。

「良太にとって、卒業ってのは、何からの卒業なんだ？」

十二月の風の中、谷中の乾燥した唇が上下に動く。

「甘え、かな」

今までの谷中からは想像できないような答えが、冷たい空気の中ではっきりと振動していた。こんなにしっかりとした輪郭のある谷中を見るのは、今日が初めてだ。

谷中はゆっくりとグローブを外した。

「帰るか？」

僕の問いに、谷中は何も返事をしてくれない。無視かよ、と思いながら、僕もグローブを外し、谷中に背を向けた。グローブを大学に返すために。

「飛ぶよ。俺は」

背中から聞こえた奇妙な一言に引っ張られ、僕は再び谷中を見た。意味不明なことを、何食わぬ顔をしてぬかすいつもの谷中に戻ったのかな、と思ってその様子を見ていたのだが、

「幹也、俺、留学することにした」

そういうことか。と、何も考えずに谷中の言葉を受け入れられる自分がそこに立っていた。今日の谷中にはその言葉が実によく似合っていたから。実に自然体だったから。

ふと見上げた十二月の低い空は、どこまでも深く、そして、大きかった。

。

久々にバイトに行った。

派遣のアルバイトは学生の都合に合わせてくれるから、なかなか都合がいい。ただしバイトを入れ過ぎるとある程度の仕事を任されるようになって、頻繁にバイトを入れられてしまうから、責任を任せられないくらいに間隔を開けつつバイトに顔を出すのが、のんびりと働けるコツなのである。

今日はコンサートのチケットもぎりのアルバイトだった。男性アイドルグループのライブだったこともあり、観客のほとんどが若い女性だった。だから、今日のバイトは比較的楽しかった。不純な理由だと言ってしまうえばそれまでなのだが、チケットもぎりという単純作業におけ

る楽しみの居所なんて、そういうところにしかないというのが本音だろう。

チケットもぎりが終わると、会場内の監視役に回り、携帯電話やデジカメでステージ上を狙っている客がいなか見回りをした。お金を払わずにコンサートの曲を聴けるのだからなかなかお得なバイトだと思う。だからと言って、わけのわからない、ただうるさいだけのバンドのコンサートを担当するのはまっぴらごめんなのだけれど。

コンサートが終わり、観客を退場させた後は会場の撤収作業が始まる。これがなかなかきついのだ。僕みたいに現場をこなした回数が少ない人間は、馬車馬の如くこき使われるし、ちょっと作業を間違えただけで、責任者からの罵詈雑言を浴びせられることになる。この撤収作業が嫌だから僕はあまりバイトを入れないようにしているのだ。

そんな撤収作業が終わった頃には、既に夜が深くなっていた。しかし、このまま下宿先へ直行してしまっただけで、疲れだけでなく、つまらないストレスまで持ち帰ることになってしまう。だから僕はバイト先の先輩と一緒に飲み屋に寄っていくことにした。まあ、僕から誘ったわけではなく先輩から誘ってくれただけなのだが。先輩も僕と同じ風に考えていたのかもしれない。

「お前、それは嫉妬だろ」

飲みかけのウィスキーをテーブルに置いた岡田さんは、僕を見ながら煙草を燻らせている。

「べつに嫉妬じゃないですよ。ただ、いきなり留学するとか言われたんで、驚いただけです。思い切った決断するもんだなって」

「思いきった決断ができるそいつのことが、羨ましいんだろ？」

「羨ましいとは思いません。だって、まだ単位揃ってないわけですし。留学して一年棒に振ってしまったら、社会に出るのが一年遅くなります」

僕は留学することが一年を棒に振ることだとは少しも思っていない。思っていないのだけれど、今はそんな表現をしてしまった。

岡田さんは煙草をふかしながら、ウィスキーを一口だけ口に含んだ。

「一年遅くなるっつたって、大学行って学生やってんだから、一年も二年も同じだろ。俺なんて高校中退だから、お前くらいの頃にはもう働いてたぜ」

今日知ったのだが、岡田さんの年齢は三五なのだそうだ。岡田さんいわく、バイトもやらなきゃ生きていけねえ、のだそうだ。いくらか借金があるという話も聞いた。

「いや、やっぱり一年は大きいですよ」

僕の言葉を聞いているのかいないのか分からないような反応を浮かべて、岡田さんは灰皿に煙草を押しつけている。

「だったら大学行かなきゃよかったんじゃないかねえの。その方が社会に早く出られるぜ？」

「いや、それはちょっと違うんですよ」

年収が違って来るんです。活躍できる範囲が違って来るんです。そう思ったのだが、それを直接言葉にすることはできなかった。肩書だけでいえば中卒の岡田さんを前にして、あなたの

ようにはなりたくないのです、というニュアンスの言葉を言えるはずがない。

岡田さんの方も、その辺のことはちゃんと分かっているらしく、
「まあ、確かに違うわな。俺としても、少なくとも高校くらいは卒業しとけばよかったと思っ
てる。何だかんだで、学歴は必要なのよ、この世の中は」

岡田さんは、二本目の煙草をふかしながら、ウィスキーグラスに手を伸ばしていた。

岡田さんの口から学歴という言葉が聞くと、なんだかいつもよりその言葉が重たく聞こえて
くる。岡田さんは実際に社会に出てから、学歴という名の壁にぶつかり、その二文字に苦しめら
れてきたのだから。経験から語られる言葉ほど重たいものはないのだから。そこらへんの学
生たちが嘯いている学歴という言葉などとは密度が違うのだ。

「お前も留学すればいいじゃん。あれだろ？ 履歴書にかけるんだろ？ そういうのって、やっ
ぱ有利になると思うぜ。社会に出る時によ」

「まあ、確かにそうかもしれないですけど。でもやっぱり一年のロスっていうのは大きいと思
いますよ」

「一年一年って、こだわるねえ、お前は。そういう細かいところに」

「そりゃあ、こだわりますよ」

一年だって無駄にしたくなかったから、受験の時の僕は浪人というリスクを避けて今の大学を
選んだ。大学のランクだって一段下げたのだ。妥協という言葉飲み込んでまで入学したこの大
学で、せっかくストレートで入ることができたこの大学で、一年間という余分な時間を過ごすこ
とだけはどうしてもしたくなかった。だから留学であれ何であれ、社会に出るのが一年遅くなる
というのだけは嫌だったのだ。なぜ嫌なのかという理由は分からないのだけれど。

「でも、英語できた方がいいとこ入れるんじゃないかねえの。グローバル、だっけか？」

岡田さんは実にぎこちなさそうに、グローバルという単語を使った。

「確かに英語はできた方がいいんでしょうけど、べつに留学しなくても英語は勉強できますから
。だから、留学するために英語を勉強するよりは、社会に出て活躍するために英語を勉強した方
がいいと思うんです。僕は」

岡田さんは煙草を吸いながら首をひねっている。

「俺には、お前が言ってる事の違いが分からんねえ。大学生が言うことは、難しくてよくわかり
ませんわ」

そう言って岡田さんはウィスキーを飲みほし、空になったグラスを見つめている。鈍い照明の
中でも、氷はやっぱり透明だった。

「そうか、」

飲み終わったグラスをテーブルに置き、全身を背もたれに預けた岡田さんは、鼻から煙草の煙
をはき出している。

「怖いんだ？」

岡田さんの低い声が、店内の薄暗い雰囲気と同調して、やたらはっきりと聞こえた。

「その友達においてきぼりにされるのが怖いんだ？ その友達だけ一人でどンドン前に進んでいっちゃうような気がしてるんでしょ、幹也少年は」

凶星だ。

「いや、べ、べつに、そういうわけではないですよ。僕は、いろんな人にはいろんな価値観とか人生ってのがあつたもんだと思つてるし、だから、その人の決断に自分がいちいち干渉するつもりもないし、その人の決断に僕自身が何か影響を受けるってこともないですし。世の中は結局、十人十色なんですよ。みんな違ふから面白いんです。だから俺は、良太の決断だつてすごく喜んでますし、海外の話をつろろ聞けるな、なんて風にも思つてるんですよ。だから、留学どうのこうので俺が焦るだなんてことはありません。俺は俺の人生を行くだけですから。人生なんて単純なものなんですよ。自分の道さえしっかり生きていればなんとかなるんです」

僕は実に多弁だつた。本当に、嘘くさい。というより、中身がない。

多弁な僕とは正反対に、岡田さんは落ち着いた口調を崩さなかつた。

「まあ、高校中退の俺にはよく分かんねえけど、興味のなつた話をペラペラしゃべるやつはいないだろうなと思つてよ。お前、さつきから留学する友達の話ばかりしてただろ。だから、何か特別な思ひでもあるのかな、なんて思つちまつたわけ」

岡田さんの言葉に、僕は残つてつるお湯割りの焼酎を一気に飲み干した。喉が熱いのか、腹が熱いのか、はたまた頭が熱いのか、今の僕にはよく分からない。自分のことなのに、よく分からない。

僕は何もしゃべることができなかつた。今は何をしゃべつても言い訳になるのだろう、ということがなんとなくわかつたからなのかもしれない。沈黙に浸つていても、岡田さんは全く気にする様子も見せず三本目の煙草に手を伸ばしてつた。

歩道に転がつていそつな味気ないライターに、スツ、と火がつともる。

「岡田さん」

僕は酔つてつたのかもしれない。だから、あんな文脈もないことを岡田さんに聞いてみたのかもしれない。

「銀杏つて、好きですか？」

僕の問いかけに、岡田さんは、何だよ急に、と言いつながら笑つてつた。

でも、ちゃんと答えてくれた。

「好きだねえ。一見癖のあるもんの方が、おいしいつてつる風に、世の中はできてんだよ」

十二月の星は高かつた。透きつた夜空の、何億光年も先で、僕たちに見つめられてつることも知らない静かな星たちが、美しく輝いてつるのだつた。

街が浮かれている。

十二月という文字には何か特別な力があるらしく、カレンダーでその月を目にすると、少しだけウキウキした気分になってしまうのは、僕だけではないはずだ。街に一步踏み出せば、視覚的映像もあいまって、気分だけが自分勝手に盛り上がってくる。どんなに批判的な人がいようとも、やはりイルミネーションは綺麗なのだ。そんな気分が行き交う人々の流れに乗って街中を闊歩し、街全体が浮かれ気分を満たされるのである。

そんな街中ほどキラキラ輝いてはいないものの、大学の中でもそれなりに何かしらの盛り上がり気分を感じることができる。べつに、大きなクリスマスイベントがあるわけでもないし、見上げるほど背の高いクリスマスツリーが飾られているわけではないのだが、なんだかみんなそわそわしているという得も言われぬ不思議な感覚を味わうことができるのだ。

そんな、そわそわ、気分が冴まれながら、僕と谷中と沙希の三人は学食のランチを食べている。数日ぶりに復活した綾香は、オフィスアワーの時間を使って教授に講義の質問をしているらしく、この場にはいない。僕は、わざわざ教授の研究室を訪ねてまで質問をしに行く綾香の行動力に感心していた。分からないことがあったら教授に聞いて解決する、という行為はたぶんすごく自然な行為なのだろうけど、僕も含めた多くの学生はそのような行為を実行することができないでいる。

恥ずかしいからだ。疑問点を訊ねるという行為が恥ずかしいというのではなく、教授に、そんなことも分からないのか、と思われることが恥ずかしいのである。きっと教授はそんなこと微塵も思っていないのだろうけど、僕たちはそういうちょっとしたことが気になって質問をしに行くことができないのだ。僕自身プライドが高い人間だとは思わないけれど、とにかく恥ずかしさだけには打ち勝つことができないでいる。べつに誰かが僕のことに注目しているというわけでもないのに。結局自分を縛りつけているのは、自分自身なのかもしれない。最近はそう思えるようになってきた。

「そっかあ、良ちん留学しちゃうんだあ。寂しくなるね」

沙希は心の底から残念そうな顔をしている。そんな深刻そうな表情の割には、プレートの上のオムライスはどんどん減っていき、彼女の腹の底は着実に満たされていっているようだ。

「べつに今すぐ行くわけじゃないぞ。三年生になるかならないかくらいのタイミングで行こうと思ってるから」

「嫌だよ～。良ちんだけは、私の仲間だと思ってたのにい」

「は？」

谷中は沙希の言っていることがよく分からないらしく首をひねっている。補足をしてくれ、と言わんばかりの視線を僕に送ってくるのだが、残念なことに僕もよく分からない。

「だって、良ちゃん、あんまし成績良くないでしょ。だから、私と同じダメ学生だと思ってたのに」

はあ、と谷中はため息をついていたが、僕は思わず笑ってしまった。

「心配すんな、沙希。良太がいなくなっても俺がいるから」

僕は沙希が羨ましい。思ったことをそのまま言える沙希が、本当に羨ましい。沙希がいなかったら僕は、谷中の前でぎこちない笑顔を作っていたのかもしれない。自分では言葉にできない複雑な思いが表情に出てしまっていたかもしれない。

「幹やんは、私より成績いいから駄目だよ。単位、結構順調なんですよ。私の不安は全然解消されないよ〜」

そう言って沙希は少し拗ねた風にしてスープをすすっている。

僕は唐揚げを食べながら、良太を見た。

「イギリスだっけか？」

「そうそう」

「アメリカじゃなくて？」

谷中はトンカツ定食を食べている。

「野球よりサッカーかな、と思ってさ」

「なんだよそれ。野球サークルに入っている人間の発言とは思えないな」

谷中は、確かにそうだな、という表情で僕の発言に頷いている。

「でも、やるなら野球、観るならサッカーって感じなのよ、俺の中では。まあ、小さい頃サッカーやってたから、サッカーしろって言われても全く問題ないしな。たぶん、野球よりもサッカーの方がうまいと思う」

谷中とのキャッチボールを思い出しながら、確かにそうだろうなと思って僕も頷いてしまった。キャッチボールだけでもその人の力量はなんとなくわかるものなのだ。

「イギリスって何かカッコ良くない？ ヨーロッパ、ってカンジだし」

山の天気のように変わりやすい沙希の表情が、谷中を見つめている。そんな眩しい視線に見つめられた谷中は少し照れくさそうに、

「イギリスはヨーロッパにあるからな」

と、沙希に返していた。

「イギリスってご飯おいしくないんだろ？」

という僕の質問には、

「そんなことないだろ。知らないけど。まあ、向こう行ったらそこらへんの真偽も確認してきますわ」

そう言って、ソースたっぷりのトンカツをおいしそうに頬張っていた。谷中の馬鹿舌ならどこに行っても大丈夫だろうと思ったが、それはイギリスに失礼なので言うのはやめておいた。

オムライスを食べ終えたらしい沙希は、デザートにプリンを食べようか迷っているようで、財布の中身と相談している。

「いいな～、異文化体験。私もしてみたいな～」

言い終えると沙希は財布を鞆の中へとしまってしまった。

「沙希も行けばいいじゃん。彼氏と海外旅行にでもさ」

谷中の発言に同意を示しながら僕も沙希へと視線を向ける。しかし、僕の視線の先では見る見る雲行きが怪しくなってきた、

「言わないで。それだけは、言わないで」

そう言いながら沙希は両耳を押さえている。

何のことやらわからない僕と谷中が顔を見合わせていると、

「別れたの。せっかくの一八〇センチだったのに、別れちゃったの。あ～ん、お馬鹿だなんて言わないで～」

誰も言わないよ、と思ったが、一応せっかくなのでリクエストにお応えして、お馬鹿、と一言だけ言ってあげた。その一言を聞き終えた沙希は、はあ、とため息を漏らして、もったいなかったなあ、と小さくつぶやいている。

「何で別れたんだ？」

と、ためらいなく聞いた谷中の疑問に沙希は、

「知らない。あんまし、かまってあげられなかったからかもしれない」

そう答えていた。

ここ最近、沙希はずっと綾香の看病をしていたそうだから、それが原因で彼氏が怒ってしまったのだろう。それにしても、それくらいのことで腹を立てる男とは別れて正解だったのだろうと僕は思う。谷中も僕と同じ意見らしく、

「それは別れて正解だと思うぞ。どんだけ小さい男なんだよそいつは。器の小さい男と一緒にいても幸せにはなれないぞ」

と、沙希を慰めていた。最後まで、身長は一八〇あるんだけどね、と繰り返していた沙希も谷中の言っていることについて反論はないようで、復縁しようとかいう風に考えてはいないらしい。

そんな沙希の別れ話を聞いているときに、ようやく綾香が現れた。僕たちを見つけた綾香が、久しぶり～、とか言いながら、小走りでこちらまでやってくる。

「綾香あ～」

半ベソをかく演技をして、沙希は綾香に抱き付いていた。沙希は綾香に対してなんの恨みも持っていないらしい。本当に、心の底から、一八〇センチなんかよりも綾香の方が大切らしい。

沙希の細い髪を二、三回撫でた後、綾香は鞆だけ椅子の上に置いてランチを選びに行ってしまった。そんな綾香の背中を見ながら、綾香あ～、と嘆き続けていた沙希の様子は、なんとも

可愛らしかった。

○

雑貨店の店内はクリスマス一色だ。

「幹也、クラッカーとかあった方がいいかな？」

百個入りの袋と三十個入りの袋を左右の手に持ちながら、綾香が訊ねてくる。

「そんなにたくさんあっても散らかるだけだろ。せいぜい十個ってところかな」

僕が答えると、綾香は、そっか、と納得した様子でクラッカー六個入りの小さな袋をカゴの中に入れた。

僕たち四人はクリスマス鍋パーティーを開くことにしたのだ。場所はあれこれ相談した結果、沙希の下宿先で決定になった。理由は四人の中で部屋が一番広いから、というごく単純なものだった。

このクリスマス鍋パーティーを提案したのは綾香である。なにやら、風邪にうなされて寝込んでいるときに思いついたらしい。ベッドで横になっているだけの生活があまりにも退屈だったから、とにかくどこかで発散したくなったのだそうだ。実はこの理由を知っているのは僕と綾香だけで、あとの二人はこれを知らない。なにせ、表向きの理由は、沙希を元気にするための会、になっており、それを提案した時の沙希の喜びようがあまりにもすごかったので、今さら本当の理由を明かすのもなんだかな、という具合になってしまったのである。

僕と綾香が鍋の具材の調達係で、谷中がお酒、沙希は部屋の掃除、という役割分担になっているのだが、クリスマスっぽいのも少しは買っていこうよ、という綾香の提案によって、僕たちは今、雑貨店にいるのである。本来はメインであるはずのスーパーでの買いだしを後回しにして、綾香はクリスマスの装飾品や小物に目を輝かせている。

「サンタのヒゲとか、どう？」

「綾香がつけるの？ 似合わないって」

しかし、綾香は首を振り、白色のひげを持ったまま僕の前までやってきて、

「幹也がつけるんだよ」

と言いながら、僕のひげ面を、ころころ笑いながら眺めている。綾香は、どこからか持ってきた、眉毛と鼻がセットになった黒縁めがねを僕にかけさせて、手を叩いて喜びつつ、鞆の中からケータイを取り出し、ナイスフォトいただきましたー、とシャッター音を鳴らしている。

僕はなんだか少しだけ嬉しかった。

「三角帽子だけにしよう。ヒゲがあると食べにくいから」

「え～。いいじゃん、幹也だけなんだから」

そんな理不尽なことを言いながら、今日の綾香は本当に良く笑う。跳ねるような彼女の足取

りが店内の陽気な音楽とダンスしているみたいだ。お店の中のどの客よりも、綾香は楽しそうに買い物をしていた。

沙希の家に集合するまで少し時間ができたので、僕と綾香は喫茶店で時間を潰すことにした。綾香の前では彼女が注文したホットコーヒーがおいしそうな香りをたてている。綾香はコーヒーをブラックで飲むらしい。僕はブラックでは飲めない。正確に言うと、飲めないわけではないのだが、ミルクと砂糖があった方がおいしくいただけるのだ。

「苦くないのか？」

僕の問いに、

「苦い方がいいの」

綾香は静かにカップを口元へと運んでいった。

時間帯のせいなのだろうか、店内の奥のほうにある落ち着いた雰囲気のある席はすべて埋まっていた。僕と綾香は喫煙しない。だから僕たちは、通りを行き交う人々と分厚いガラス一枚隔てただけの、窓際の席へと腰を下ろした。

通りを行き交う人波は、自身の内側から発せられる温度を逃がさぬよう、マフラーやニット帽で身体を覆い、冬の季節をカラフルに彩っている。冬の歩幅が狭いのは寒さのせいなのだろうか。それとも、隣を歩くその人との時間を少しでも長く過ごしたいからなのだろうか。

「私のせいなの。沙希が別れたのは」

窓の景色がハッと曇った。僕の吐く息が水滴を作ったのだ。白くぼやけた視点をそっと横にずらしていく。僕の視界に映った綾香は、白く濁った窓の景色を見つめていた。

僕は綾香になんて言えばいいのかわからなかった。だから僕は何も言わなかった。何処を見たいかいいのかわからなかったから、僕は視線をテーブルの上に置いた。

綾香は、白く分厚いコーヒーカップで両手を暖めている。

彼女は僕が作り出してしまった沈黙を気にする様子もなく、一拍間をおいてから再び口を開いた。

「沙希、私の前で振られたの」

「綾香の前で？ 彼氏が乗り込んできたのか？」

僕の問いに、綾香は首を横に振っている。

「電話で」

ああ、と言ってから僕は背もたれに沈み込んだ。沙希が綾香の看病をしているまさにそのタイミングで、携帯電話が鳴ったのだろう。そして沙希は、その電話口で別れを告げられたのだ。一八〇センチの彼は沙希のバイト先の先輩だそうだから、直接顔を合わせる機会もあったはずなのに。

「電話だけで済ますなんて、ひどいよな」

僕が漏らした一言に、綾香は首を振り続けている。

「ひどいのは私だよ。私が一人で全部やってれば、沙希は別れずにすんだのに」

マフラーに包まれていない彼女の首筋は、冬の空気みたいに白く透き通っている。

「でも、沙希は綾香のことを恨んだりなんかしてないぞ。マジで。あいつはずっと綾香の心配してたんだ。一八〇センチなんかより、綾香のほうが大切だったんだよ。沙希にとっては」

「それ、沙希が言ってたの？」

綾香の深い瞳を見つめながら、僕は力強く頷いた。

綾香はいつもよりほんの少しだけ長く瞬きをすると、そう、と消えそうな一言だけをつぶやき、ブラックのコーヒーに口をつけた。彼女に調子を合わせるように、僕も自分のカップに口をつける。

「沙希ね、泣いてたの」

僕の甘ったるいコーヒーが、腹の底に沈んでいく。

「声を殺して、泣いてたの」

僕は想像できなかった。沙希が自分の感情を押し殺して泣いている姿を。

「私、何も言えなかった。沙希のあんな姿、初めて見たから。声を掛けていいのかすら、わからなかった」

沙希にかける言葉が見つからなかった綾香は、その代わりに沙希との距離を縮めたいらしい。沙希が泣く声は距離を縮めてみてもやはり消えそうな程度でしかなかったのだそうだ。綾香の温度を感じた沙希は、そのまま綾香の胸の中で泣いていたらしい。声だけは小さく、されど少しも控えることなく、思いっきり泣いたのだ。

ひとしきり泣いた後で、沙希は綾香の顔を見上げながら、「プリンが食べたい」とつぶやいたそうだ。綾香が冷蔵庫からプリンを取り出し、スプーンを差し出すと、沙希は、ありがとう、と言っておいしそうにプリンを平らげた。そして、腫れぼったい目をしたまま、自分の中で一八〇センチとの一区切りをつけたらしい。

「沙希、今日でプリンはおしまい、って言ってた」

「なんでまた？」

「太りたくないからだって。また彼氏を探さなきゃいけないから」

「なるほどね」

僕はミルクの混じったコーヒーを意味もなくかき混ぜる。沙希は沙希なりに、自分のペースで、自分の坂道を上っているのだろう。歩幅なんて関係ない。ただ一步一步着実に前進していくことが大切なのだ。

そうだとわかっている僕も、僕はなかなか一步を踏み出せていない。

「ねえ、幹也」

冬の街が咲き出した。

「愛してる、って、なんだと思う？」

夕闇に映えるイルミネーションが分厚い窓にぶつかり、ぼんやりと溶けていく。

「好きだって言うこと？ 優しく抱きしめるって言うこと？ ねえ、何だと思う？」

綾香の問いかけに僕は、首を振って答えた。

「わからない」

そうやって僕はコーヒーを飲み終えた。綾香も最後の一口を飲み終え、コーヒーカップをテーブルの上へと静かに置いた。

「私もわからないの。難しいよね、そういうのって」

そもそも考えるものではないのかもしれないな、という僕の言葉に頷きながら、綾香は彼女の細い腕時計を見た。

「そろそろ行こっか」

そうして僕たちは、鮮やかな冬の街を通り、沙希の家へと向かうのであった。

○

クリスマスに雪は降らなかった。ただ寒い夜だけが静かに瞳を閉じている。

缶チューハイを片手にベランダへ出た僕と綾香の後ろでは、谷中と沙希が幸せそうな寝顔を見せている。二人は散々騒いだ挙句、疲れて寝てしまったのだ。

「良太のやつ、酒が弱いなら飲まなきゃいいのに」

「飲みたかったんだよ、きっと。いろいろ不安なんだよ」

綾香の言うとおりに、今日の谷中は留学に対する不安ばかりを口にしていた。谷中は半分しか開いていない目で僕を見つめて、連絡するからちゃんと返してくれよ、と何度も何度もお願いしていた。その言葉を聴いて、僕は心の底から安心した。谷中は谷中だったから。留学をすると決断した谷中は僕の知っている谷中のままだったから。

だから僕は心の底から変わりたいと思うことができた。

「留学から帰ってきた良太は、何か変わってるのかな」

僕がこぼした言葉に、寒そうな指先でチューハイを飲んでいる綾香が口を開く。

「英語ペラペラだよ。きっと」

うれしそうな綾香の表情に、

「何でそんなにうれしそうなんだよ」

僕が訊ねると、

「だって、海外旅行に行きやすくなるでしょ。良太に通訳してもらえばいいわけだし」

綾香の考えに僕も賛同していた。谷中に頼って行動するのもありだなと、素直に思える自分がそこにいた。そうしてようやく僕は僕自身が見えるようになったのかもしれない。窓ガラス

に薄らと映った自分の姿を。

部屋の中では食べ終わったばかりのキムチ鍋がテーブルの真ん中に座っている。その周りには最後に作ったキムチ雑炊の取皿がおのおの位置に置かれており、余ったテーブルのスペースを空になったビールやチューハイの空き缶が無造作に占領している。その下でコタツに足を突っ込みながら幸せそうな寝顔を見せている沙希と良太は、いったいどんな夢を見ているのだろう。

「綾香、さっきの話なんだけどさ」

斜めに落ちていく冬の風を見ていた綾香が、僕の方に振り向いた。

「さっき？」

綾香は首をかしげている。

「喫茶店での話だよ。あの、好きとか嫌いってなに？ みたいな」

「ああ。愛してるってどういうこと？ っていうやつね」

「そうそう、それ」

冬の空気が喉にしみる。

「さっきはうまくいえなかったけど、あれからいろいろ考えて、俺なりの答えが出たんだけど。どう、聞いてみる？」

綾香は、あはは、と笑った後、ゆっくり頷いてくれた。

僕は冷たい空気を吸い込んで、クリスマス空に、白く息を吐いた。

「愛するとは、隣にいることである」

われながら完璧だと思って発言したのだが、綾香はなぜだかこころこ笑っている。夜が暗くなければ、僕は赤色に恥ずかしがった自分の顔を隠しきることができなかつたろう。

「幹也、酔ってるの？」

綾香は涙が出るくらいに笑っていた。

「酔ってない。てか、そんなに笑うなよ」

ごめん、といいながら、彼女は笑い涙を指先で拭いた。お腹が痛くなったら幹也のせいね、と言った後、綾香の澄んだ瞳は僕をうつしている。

「幹也は、隣にいたいと思える人、いるの？」

冬のベランダで聞いた綾香の言葉は、真っ直ぐに僕の中に染み込んできて、そして――。

「幹也、」

星が綺麗だった。

「メリークリスマス」

年末は実家に帰った。逆再生される路線をゆっくりとたどりながら、見慣れた景色の駅に着く。人が多くない改札を抜けて少しだけ歩くと、駅前の工事中と書かれた看板に突き当たった。僕は携帯を取り出し地元の友達に、帰ってきたよ、と電話をかけた。懐かしい声を聞きながら細い道を通り過ぎると静かな居酒屋が何件も並んでいる。ゆっくりとした呼吸に歩幅を合わせながら、その日の晩は高校時代の友達と過ごした。

色が濃い地元の夜は月が綺麗だった。

冬休みが明けるその日まで、僕はお餅を食べたり初詣に行ったりお正月特番を見たりしながら実家で過ごした。実家に帰った僕は、改めて親のありがたみというものを感じた。それはご飯がなにもしなくてもテーブルの上に置いてあるだとか、食器を洗わなくていいだとか、そういう甘ったれた生活の一部から感じられるものだった。それが実家でそれが家族だというぬるま湯の感覚から、僕は未だに抜け出すことができないでいる。いつになったら抜け出せるのかという予定も当分立てられそうにない。

そんな僕でも実家に背を向けながら過ごす新幹線の中では自分というものと向き合ってみたくなる。窓に映る早送りの景色が僕を焦らせていたのかもしれない。でも、シートにもたれかかる外枠の自分はスローミュージックに浸っている。横向きに流れる掲示板ニュースが日本の景気を伝えていた。皺だらけの新聞をたたんだスーツの男性が目を閉じて仮眠をとっている。僕はぬるくなった缶コーヒーを飲みながら窓の外を見つめていた。背が高い建物が流れ始めると僕はイヤホンを外して時計を見た。時刻は乗車券とほぼ同じ時間を示している。

まだ飲みかけのコーヒーを手に持ちながら、僕は電車を乗り継いだ。下宿先の鍵を開け、つま先の方だけ若干重たい缶コーヒーを台所に置いた僕は、寒くなった一人部屋をハロゲンヒーターで暖めた。壁に跳ね返ったオレンジ色の光を見ながら、僕は明日の大学のことについて考えている。二週間ぶりの大学はたぶん何も変わってない。新年をむかえたからと言って、何かが大きく変わるわけじゃない。三月になれば卒業する人がいて、四月になれば入学する人がいる。でもやっぱり何も変わらない。僕にとっては全部同じ大学。いつかは変わりたいし、変わるのだろうけど、それでも今は同じまま。

携帯が鳴った。

電話に出た僕は、明日から少しだけ何かが変わるのではないかと狭い部屋の中で期待した。なぜだか天井だけは高く設計されているこの部屋の中で寝転がりながら話す僕の視線が、置きっぱなしにされた缶コーヒーに注がれる。

「やっぱ俺、ブラックは無理みたい」

○

冬休み明けの長く重い坂道を僕は上っている。

「お年玉もらったか？」

珍しい景色もあったもんだ、と言いながら近づいてきた谷中は、福袋で買ったらしいダウンジャケットのポケットに手を突っ込みながら眠そうに息を白めている。

「さすがにもうないだろ。良太はもらったのか？」

僕の問いに、谷中はマフラーにぐるぐる巻きにされた首を振った。

「留学にお金いるんだから、もらえるわけがない」

「全部親に払ってもらうのか？」

「半分はバイト代。うちはそんなに裕福じゃありませんよ」

そう言って谷中は歩幅を広げる。

「英語は遅刻できないから。んじゃ、また後で」

駆け足の谷中の背中が遠のいていった。人混みを軽やかに駆け抜ける彼のダウンはいつまでたっても色褪せなかった。僕たちの視力が追い付かなくなって初めて、軽やかな背中が見えなくなる。残った景色はいつもと同じ冬の坂道。この中にいる学生のいったい何人が、新しい一年を過ごすことになるのだろう。他人と変わり映えのしない冬服の中で、一人一人の時間は各々テンポで流れているはずだ。

「走るか？」

だから、坂道を二人で登るのだって、たぶん立派な変化なのだと思う。同じように坂を上る他の誰かから見れば、それは何ら変化のないつまらない景色なのかもしれない。坂下から続く幾人もの学生の中であって、一人も二人もたいして変化のないことなのかもしれない。見た目だけじゃ分からない変化はきっと否定されやすく、肯定する価値を見つけるのは簡単なことではないだろう。それでも思考の上には現実が立っていて、現実の中には時間が流れている。地球が止まらず自転している限り、世界の中心が自分自身である限り、僕の隣がほんのり温かい事実だけは、だれにも否定されはしない。誰にも否定させはしない。

人込みをすり抜けてきた冷たい風が、何もない横顔の木々を通り過ぎていく。坂下を吹き抜ける、乾燥した冬の景色が、白い吐息を舞上げた。これは、僕が登校中の大学で、初めて見る景色だったと思う。

いつもと変わらない静かな朝に、白い雪が降っていた。